

ラボの英語表現活動とその評価のシステムについて
～21世紀のグローバル英語コミュニケーションの観点から～

本名信行

(社会言語学, 青山学院大学名誉教授)

論文の概要

ラボの教育理念は世界に羽ばたき、国際社会に貢献する人間の育成である。そのために、子どものときから、異文化に触れ、コミュニケーションに慣れ、感性と知性を磨き、他者を理解し、自己を表現する学習プログラムを提供している。英語教育はその一環に組み込まれている。ここでは、グローバル英語コミュニケーションの観点から、ラボプログラムの育成的評価システムを考える。

キーワード

ラボの理念, 人材育成, 英語表現活動, 育成的評価, グローバル化時代の英語コミュニケーション

1. はじめに

ラボの英語教育は人間教育と理解され、人と人との交流とコミュニケーションを育む能力の養成をめざしている。これは21世紀の多文化共生社会に求められるグローバル英語コミュニケーション (Global English Language Communication, GELC) で求められる能力と合致する。本稿では、ラボの英語表現活動に焦点を当て、そこで展開される活動をどう評価するかを検討する。そして、ラボの英語教育を GELC の観点から考察する¹⁾。

2. ラボの自発的創造的な英語表現活動

ラボではテーマ活動と国際交流などさまざまな英語表現活動の機会を提供している。これらに加えて、さらにいろいろな活動が実施されている。それらはラボのプログラムに組み込まれたものと、チューターが自発的に創造的に考案したものがある。また、チューターはそれらを英語表現活動と意識して行っている場合もあれば、無意識に行っている場合もあり、実に多様な活動になっている。

いずれにしても、これらの活動はテーマ活動と国際交流などで育成した能力を活性化させ、実践化させる活動として、非常に有意義といえる。以下に、いくつかの事例を述べる。その多くは体系化されておらず、評価のシステムも方法も未開発のものである。しかし、どれもラボの子の能力育成に大きく貢献するものと思われるので、教育プログラムとして本格的に設計することが望まれる。

2.1 2017-18年くろひめウィンターキャンプの English Special Lodge

これは2017年12月26日～29日にラボランドで実施されたウィンターキャンプ1班で、そのうちの4ロッジを主として英語活動を行うロッジとして組織したものである。実施コンセプトとして、「英語を使ってみよう」「自分の英語の蓄積に気づく」「英語を話す楽しさを実感する」とある。参加者数は102名（ラボ会員90名 [小4～大学生]、チューター4名、シニアメイト9名）で、インターナショナルユース（AUS=8名、NZ=5名*含むシャペロン）も一部のプログラムに参加している。

内容は次のようである。ロッジでは英語を使うことを意識し、日本語を使ってはいけない時間（Non-Japanese Time）を積極的に活用することを求めた。そして、姉妹ロッジとの交流会では、英語のみの発表を計画し、テーマ活動の『ペルセウス』に取り組んだ。野外活動で、英語で書かれた指示書を読みながらネイチャーゲームをし、インターナショナルユースと英語でコミュニケーションをとりゲームやアクティビティ、そしてテーマ活動を行い、さらにそれぞれが自分をアピールする「Original Poster」を作成した。

ふりかえりと参加者のようすとして、次のような観察が報告されているⁱⁱ。英語を使うことへの興味と学習意欲は、運営側が予測していたよりもはるかに高かった。小学生を含め、Non-Japanese Timeには積極的に英語を使う姿が多くみられた。ただし、本件はウィンターキャンプの一環として実施されたので、ロッジ内で英語を使う量はそれほど多くはなく、今後はもっと増やす必要があると考えられる。

参加者の感想も興味深い。小学生はたいがい英語経験が少ないので、「英語しか話さない」となると不安に思うはずである。それが楽しいと思うようになれば (a)、このプログラムはまず成功といえる。また、ここでの英語経験を通じて、英語をどんどん使うことの大切さを意識するようになれば (b)、自発的な学習意欲を育成することにつながり (c)、有意義である。

(a) ぼくは最初は英語ロッジはいやだと思ったけど、意外と楽しかったです。3日目プログラムではインターナショナルユースと遊び、すごく楽しかったです。(小5男子)

(b) 私は、このEnglishスペシャルロッジで、ご飯の時に日本語をしゃべらないで、わかる物もあったけど、むりやり英語にしたりして通じたりして、このわかる英語をどんどん会話文にしていくことが、さ来年の国際交流に大切だとわかりました。<中略>来年国際交流には行かないけどこのEnglishスペシャルロッジでたくさん英語をつかえたのでよかったです。(小5女子)

(c) 「Non-Japanese time」では、英語で言いたいことを伝えるのはとても難しかったけど、言いたいコトが相手に伝わった時のうれしさは、言葉には表せない程です。分からないコトは友達やシニアに聞いてみたり、辞書をひくことで新しいコトを知るうれしさもありました。(小6女子)

(d) ノージャパニーズタイムでは、単語を並べて伝えようとして、交流本番と同じだなと思った。国際交流のときの英語が伝わるの？という不安がとれて、すごく楽しみになった。(中1女子)

同時に、高校生や大学生には、このプログラムの問題点もみえている。English Special Lodge といながら、英語を使う時間が少ないということ、また時間の配分や指導の方法などに改善の余地があるようである (d)(e)(f)。どうしたら参加者の期待に十分に答えられるか、このプログラムをより有意義なものに仕上げ、最大限の効果をもたらすのには、これから多くの工夫が求められる

るであろう。

(e) 今回は English Special Lodge というのもあって、英語しかつかわない時間が設けられている。小学生たちもがんばって理解しようとしていて、話そうとしていて、もっとこの時間があつたらよかつたと思う。ただ、皆がなじみはじめる1日目と、たくさん話したいであろう3日目の晩はオールイングリッシュにする必要はないかなと感じた。(高1男子)

(f) English スペシャルロッジ内は英語で溢れているかと思いきや、配分が難しかつたようで、自分が想像していたよりも英語要素が少なかつたように思いました。でもそれはシニアメイトではなく、参加者の積極性にもあるかなと思って、高いモチベーションをもつた人がどんどん引つ張つていけたら、より良い English スペシャルロッジになつたと思います。(大1女子)

2.2 2018-2019年くろひめウィンターキャンプ English Special Lodge

これは前年に続き第2回目のプロジェクトとして、2018年12月26日～29日に開催された。参加者も160名に増大し、6ロッジ使用になつた。インターナショナルユースは各ロッジに1名が期間を通して参加、シニアメイトは計12名に増えた。実施コンセプトは前回と同様で、参加者との(日本語と英語による)コミュニケーションを大切にしながら、段階的に英語を使うことに慣れ、自分のなかにたまっている英語に気づき、英語を使う楽しさを感じ、「自信に変えていく」ことであるⁱⁱⁱ。前年の振り返りをふまえ、シニアメイト準備合宿中から事務局スタッフも含め、英語でコミュニケーションすることを意識して増やした。

今回は“**We Love Japan**”をテーマに、自分の考えを英語で伝えるエクササイズをした。昨年は個人作業であつたが、今年はグループ活動に変更した。学生・中学生は「日本の好きなどころ」と題して、イラストを描き、紙芝居を作成し、プレゼンをした。高校生・大学生は「日本の好きなどころ」だけでなく、その理由を含めて資料を作成し、プレゼンをした。インターナショナルユースはユースグループでまとまつた。

高校生・大学生の「スライドワークシート」には、興味ある事例がたくさんみられる。たとえば、こんなパターンがある。まず、全体をみて、次の項目を埋める。テーマ：日本の好きなどころ。① Japanese Food. 理由：Delicious, many kind [ママ] of food. ② Japanese Culture. 理由：History, temple, shrine. ③ Japanese Animation, Comic. 理由：Funny, Interesting, Exciting.

そして、8つのスライドを使って、その内容を書き込んでいる。① Food ② ラーメン、そば、たこやき、おにぎり、おすし ③ Culture ④ ゆかた、おちゃ、おんせん、きもの、神社 ⑤ Animation and Comic ⑥ どらえもん、じばにゃん、わんぴーす ⑦ さざえさん、ちびまるこ、ポケモン ⑧ We ⑨ Love ⑩ Japan。分担者がこれらを掲げ、英語で説明している姿が想像される。

最後に「まとめ」として、**So, we love Japan very much! Thank you for listening.**と記している。

参加者はこの English Special Lodge を大いに楽しみ、学ぶことが多かつたと思われる。そのことは「感想文」によく表現されている。

(g) English をたくさんつかいながらいることは、あまりやつたことがなくて、どうしよう、と思つたけど、安心できた。(小6)

(h) 4日間を通して前回より英語を話す時間が多くて嬉しかったです。小学生も最初はとまどったりしていましたが、少しずつ自分から英語を口にしてのを見て、嬉しく思いました。(大4)

(i) 今回は初めて English Special Lodge で、英語を上手に話せないからすごく不安でした。1日目は聞くだけでまったく単語がでてこなかった。けれど、今回のキャンプの目標が STEP ということで、Non-Japanese Time やロッジ活動で知っている単語やジェスチャーで伝えようと努力しました。そしたら、3日目にはスムーズにみんなに言いたいことが伝わるようになってうれしかったです。この体験を生かしてこれからも英語をつかって話すことに挑戦したいです。(中2)

(j) ジャックは日本語、私は英語、楽しかった。本当に英語は自由だと思った！(小6)

(k) I had a very good time there. When I arrived at Lodge, I was very nervous. But senior mate is X. When I watched his face, I was very happy and I thought the camp will be great. Senior mates were so good, so I was very excited. English Lodge is so fun and good! I want to join this Lodge again! (高3)

(l) ...カレッジメイトとして担当させてもらった。...思ったより英語で楽しかった。シニアは分かりやすく話してくれたし、あれだけの英語量のおかげで、ロッジの小中学生もたくさん英語を話してくれたと思った...

ラボっ子は新しい環境に入るのに不安を感じていたようだが、パーティでの話しかける、友だちになるという経験を生かして、まずはよいきっかけを作っているようである。また、英語を使う機会を与えられ、話すように促されると、学習した英語がなんとなく口から出てくることに気づく。通じるので、けっこういけると思い、自信につながる。そして、もっと学びたいという気持ちになる。参加者がこのような思いに至ったことは、3泊4日という短期プログラムのねらいが的中したといえる。

今回のプログラムで、あらためて“STEP”が有益であることが明らかになった。“STEP”とは、Smile (笑顔)、Thank You (ありがとう)、Try (積極的に)、Eye Contact (目を見て話そう)、Please (お願いします)、そして Polite (礼儀正しく)の頭文字で、ラボが国際交流に参加するのに大切な心構えとして用意している合言葉である。この文書を事前に配布し、キャンプ開始時にも説明している。ラボっ子はこんな感想をもらしている。

(m) ...来年国際交流に行くから English Lodge にして、もっと“不安”でした。でもみんなが話しかけてくれて...気づいたらずっと笑っていました。みんながすぐに“不安”を解消してくれて、やっぱり“自分から話しかけて交流する”ということが大切だな、とあらためて思いました。“STEP”は国際交流で...すごく大切と教えられたから、“STEP”の事は分かってたけど、このウインターキャンプでもう1度1からやるつもりでやったら、すごく大切だって分かった...“STEP”のおかげでこんなに“楽しく”なるんだと思いました。... (小6)

実際、“STEP”の概念は、国際交流にかぎらず、ラボのパーティ活動全般で有意義といえる。それは、ラボがテーマ活動でめざす、出会い、交流、コミュニケーション、英語学習の総合的な特徴を言い得て妙である。この意味で、“STEP”は国際交流の目的のために特記するのではなく、ラボ・パーティのすべての活動において強調されるべきものと思われる。そして、この視点はこれら2年間のプログラムを評価するさいに、とても重要になる。

2.3 プログラムの評価について

私の考えでは、English Special Lodge プログラムはきわめて有意義で、かつラボの教育理念にとって重要である。ぜひ、ラボ教育センター本部でこれを新事業と組織化して、本格的に取り組んでほしい。そのためには、これを教育プログラムとして、しっかりと設計しなければならない。それには次の記述が必要である。

(1) 目的と目標

すべての教育プログラムはその意図する目的と、めざす目標を明示しなければならない。その明文化は関係者の共通理解のために欠かせない。本件の場合には、ラボの主要なプログラムである「テーマ活動」と「国際交流」との明確な関連づけが求められる。

(2) プログラム

教育プログラムはできるだけ詳細にそのコンテンツとラーニングアウトカムを明らかにすることが求められる。小4から大学生まで参加する本件のような場合は、集団間によって期待値が異なるので、提供するインプットと期待するアウトプットの設定には、実質的な工夫が求められる。また、子どもの英語学習意欲や保護者の願いなどを考えると、3日間でコミュニケーションを円滑に進めるのに必要な50とか100とかの英語コミュニケーション語句(表現)を、ラボ流に「学び」、さまざまなアクティビティで「使い」、そして「身につける」といったセクションを開発できないだろうか。

(3) 方法

教育プログラムはその運営方法が十分に考慮されていなければならない。有能なスタッフ(リーダーやメンターに加えて、マネジメントのエキスパート)の確保、ファイナンスの準備、募集^{iv}や広報の計画は念入りになされねばならない。

(4) 評価

すべての教育プログラムは、そのシステムの改善と発展のために、評価を必要とする。評価は会社のボードによる評価、プログラムプランナー(担当者、マネージャー、ディレクターなど)による評価、参加者(受益者)による評価が望ましい。

・ボードによる評価

企業はボードミーティングで自社のミッション、活動、そして業績を常に評価することが求められる。社会のニーズに応え、カイゼンを目指すためである。教育サービスを提供する会社は自社のさまざまなプログラムの成果を相互に関連づけ、総合的に評価する必要がある。そのために、マネジメントの一環として評価チームを組織し、定期的に見直しを図ることが望ましい。

・プログラムプランナーによる評価

特定のプログラムの評価は、そのプランナー、マネージャー、ディレクターなどの仕事の重要な一部である。まずは、そのことを自覚しなければならない。すなわち、プログラムを計画するときには、そのなかに評価を組み込まなければならないのである。評価の項目はプログラムの目的(の妥当性)、コンテンツ、運営、ファイナンス、他のプログラムとの関連、参加者の満足度、

学習成果など、多岐にわたる。特に、学習成果はだいいじであるが、数量化できない、あるいはそうしないほうが適切なケースがあるので、工夫が求められる。

・参加者による評価

参加者の評価が重要であることは、言うまでもない。先にあげた参加者の感想文 (a-m) には、本プログラムの改善と発展のつながる有効な形成的評価が示されている。先に示した (m) の感想から、STEP の重要性が明らかになった。これは興味深い事例である。プログラムプランナーがこの重要性を評価し、次回で新たな工夫をこらし、さらにこの合言葉がラボ活動全体に及ぶようになれば、このプログラムの評価がラボ全体に循環し、カイゼンに貢献することになる。

・学習成果（ラーニングアウトカム）の評価

教育プログラムの要諦は受益者に学習成果の目標を記し、その達成度合いを評価することにある。3泊4日という短期間のプログラムでは、それなりの成果目標を考えなければならない。(英語) コミュニケーションを大量に体験し、(英語) 学習意欲の高揚を目指すといったところが適切であろう。なお、達成度評価はプログラム終了後すぐに現地で行う必要はない。チューターが長く見守り、この日の経験がテーマ活動や国際交流でどのように発揮しているかを見る余裕がほしい。このことは上に述べたコミュニケーション英語語句(表現)学習についてもいえる。これが短期プログラムのための、ラボならではの評価基準ではなからうか。

2.4 書を捨てて街に出よう

ラボ・パーティのなかには、教室を離れて街に出て、活動することもある。あるパーティでは丸1日使って、代々木公園で外国人にインタビューした。小1から高校生までの20名くらいが「英語の勉強中、ラボっ子です」という名札をつけ、高校生がリーダーになりグループで活動した。インタビューでは、世界地図を見せて、「どこからきましたか」とか「日本に来た目的は」などを聞いた。

午前と午後の2回で、午前中の反省会をやり、午後に備えた。たいがいは、笑顔の応答を受け、声をかけることのためらいや恥ずかしさが、喜びに変わる体験になった。当時のスナップ写真にラボっ子のうれしそうなお表情が写っている。「もっと英語を勉強してから来い」とか、あっさり「ノー」といわれたこともあったが、一度でも成功経験があると、先に進みやすいとのこと。インタビューのお礼にと、ラボっ子が手作りした「5円玉入りお守り」(英語説明付)は実にお見事!

このような活動はラボっ子にとって、よい経験になったと思われる。しかし、継続的にこれを実施することはなかった。主催したチューターによると、事前準備、当日の対応、そしてセキュリティなどを考えると、チューターがひとりでするのには荷が重すぎたのである。それでも、このような独創的なプロジェクトを考える構想力と進取の気性は、大いに評価されるべきである。また、最近の安全事情を考えて継続しないという判断も適切と思われる(2019年春も、数パーティ合同で実施予定)。

ただし、この一時的な活動のなかに、ラボの教育プログラムが求めるものがある。それはなによりも、ラボっ子の笑顔に表われている。子どもたちは交流とコミュニケーションを望んでいる。

ラボはこのような機会をもっと工夫し、創設すべきなのである。English Special Lodge の拡充が期待される所以である。また、多才なチューターがいるからには、同じような趣旨で安全が確保できるプロジェクトを実施しているパーティもあるにちがいない。情報の共有が求められる。

これらプログラムについても、上記 (1) ~ (4) にそった評価が必要である。なによりも、カイゼンのためである。そして、短期プログラムなので、学習評価は短絡的であってはならないし、いそいではならない。これがラボっ子の成長にどういう意味をもっているかなどが評価の基準になる。

あるチューターがこんな話をしてくれた。小5男子が、韓国の小5男子をホームステイで受け入れた。日本語も英語も通じない。それでも、日本語を教えたりして、一生懸命に交流し、通じたときの喜びを実感。その後、彼の「おはなしにつき」に変化があり、CD の聞き込みもよくなった。英語に強い関心が高まっているようである、と。

全国のラボチューターで、このような感想をお持ちの方は、たくさんおられることであろう。いろいろな「できごと」(イベント、プログラムなど)が、子どもの成長にどう影響を与えているかを見守っている。ただし、これを評価とは認識していないようである。しかし、これは評価なのである。私はこれを子どもの育成のための育成的評価と呼んでいる。チューターはこれを評価と意識することによって、こどもの成長を見守りとして自分の胸にしまっておくのではなく、子どもの育成に深くかかわっていることを自覚してもらいたい。

『ことばの宇宙』(2018-2019WINTER)「ラボっ子のはこぶね」(p.32)に、兵庫県のパーティの活躍が載っている。伊丹市立図書館「ことば蔵」が2016年に、夏のセミナー「みんなの寺子屋」で授業をする先生を公募した。このパーティの小3一中1のラボっ子8名が応募し、「英語で楽しむわらべ歌」と「英語で楽しむ絵本・うた・ゲーム」の2時間の「授業」をした。

ラボっ子は「先生」として事前の準備、当日の「授業」をこなした。生徒、聴衆を交えたため、きちんと説明をする必要があり、貴重な経験をしたという。このような機会では、ラボっ子とチューターが自分の活動を適切に「評価」する訓練が大切になる。なによりも自分のためであり、以後の活動をよりよいものにするためである。

3. 「とつてもみじかいおはなしコンテスト in English」

これは自分の見たこと、感じたこと、考えたことなどを、きっちり 50 語の英語で表現する活動である。作品は選考のうえ、『ことばの宇宙』(426, 430, 434 号)に掲載される。テーマ活動で身につけた英語を大いに生かして、想像的な自己表現能力の育成につなげようとする試みである。いくつかのラボ・パーティで実施され、有意義な成果をあげている。

3.1 Extremely Short Story Competition (ESSC)

この背景には Extremely Short Story Competition (ESSC) という考えがある。本名 (2016) はこれをラボっ子の自己表現の訓練にとって最適と論じている。さらに、これは書く活動なので、ラボっ子は時間をかけて自省ができるし、チューターは継時的に見守りが可能になる。ラボっ子は書

く機会を与えられると、次のような成長のきざしをみせる。

- (1) 自分の感じたこと、考えたこと表現しようとする意欲がわく。
- (2) 書く課程で、テーマやその細部を意識的に分析し、総合する。
- (3) 表現したいという願望があると、英語をもっと学習したい気持ちになる。
- (4) 英語をかくことで、テーマ活動などで学習した語彙や構文が身につく。
- (5) 英語に細心になると、日本語にも細心になる。

実際、「とつてもみじかいおはなしコンテスト in English」に取り組んだラボっ子の感想と意見には、興味深いものがたくさんある。

- ・昔やった（テーマ活動で）物語の役のセリフをつかえて楽しかった。（中1）
- ・50 words ぴったりにするのが難しかった。何回も調整しました。いろんな単語を頭で浮かべながら作ったので、ためになりました。冬休みにまたやりたいと思います。（中2）
- ・50 words に収めることが難しかった。物語を書いていると使えそうなラボのナレーションが、短い物だが、頭にぱっと浮かんだ。（高2）
- ・50 words 作文は、大学でもやっているのでもスムーズに作ることができました。しかし、50 words の単語の中にストーリーを見出すことは結構難しかった。でも楽しかったです。（大3）
- 指導したチューターの感想と意見には、まさにことがらの本質が浮かぶ。
- ・ライブラリーの英語を使って表現しているラボっ子も数名いた。ラボ・ライブラリーがフラッシュバックしているようだった。
- ・正直 50 words 丁度などできるのか・・・と半信半疑でしたが、中学生でもできることが分かり、驚きとともに子どもの能力の高さを痛感した。我々チューターは様々な面で子どもが成長できる環境を整え、継続的に見守ることが仕事だと思った。（本名 2016, pp.53-56）

「とつてもみじかいおはなしコンテスト in English」は2016年の夏に始まり、2018年で3年になる。応募作品は実に多彩で、興味が尽きない。ラボっ子は自由で、イメージーションに富み、かつ観察力に長け、さらに繊細でもある。このような発言の機会が与えられたことで、その能力が開花することがよくわかる。ここで、いくつかの作品を原文のまま紹介したい。

(1) Earth SOS

One morning Someone called “Akira, Help me”

“What’s the matter?”

“I’m Earth I’m getting fever because human cut the trees and increase CO2.”

“My family use the electric-car to reduce CO2”

“Oh, thank you”

Ten years later

“Hey, Akira it’s me. I’m OK now, I’m getting better for you”

“Good” (小6)

環境に対する思いや考えを、擬人化された地球と自分の対話というかたちで表現するという発想がすばらしい。「温暖化」を“getting fever”（熱病にかかる）と表現しているのもよい。英語の基

本構造を獲得していることがわかる。

(2) My family

Who saw when I was born?

My beautiful mother!

Who saw when I walked for the first time?

My cool father!

Who talked with me for the first time?

My nice brother!

Who went to a park with me for the first time?

My kind grandpa and grandma.

I am loved. (中3)

発想, 構成 (流れ), そして英語ともにすばらしい。子どもが成長していく順番に “Who...” で始まる4つのトピックのたてかたもおもしろい。自分をサポートしてくれている家族への感謝の気持ちが伝わってくる。英語だからすなおに表現できたのか。そうすると, 英語はもうひとつのことばになる。

(3) I am a book

I'm only a bundle of paper whose surfaces have a lot of characters.

But I have a special skill.

I can take you anywhere you want to go, such as foreign country, the moon, and the Edo period.

You can be a explorer with me taking your big imagination wings. (高2)

「吾輩は本である」の展開。本が導く「読書」という活動の幅がよく表現されている。読者は書物により開拓者になるとし, “with me taking your big imagination wings” という動名詞構文が見事につかわれている。これは日本人学習者が簡単に獲得できるものではない。このレベルに達すると, (a) foreign country と a(n) explorer のケアレスミスが惜しまれる。

(4) Love

My parents bring me up with love.

My friends crack me up with love.

My siblings take care of me with love.

My boyfriend asks me to get married with love.

My sweet children are welcomed into this world with love.

My whole life is succeeded with lots of love. (高3)

My で始まり love で終わる文章のくり返しがりズミカルで心地よい。さまざまな人の愛に支えられて生きていることの喜びがよく表現されている。高学年になると, 愛の世界が広がり, それを表現したくなるのか。

(5) Crazy About You

If I had two wings, I would fly to you.

If I were rich, I might give you whatever you want.

If I could dominate the world, I'd change your
birthday to holiday.

If I were astronaut, I'd name your name for new
planet.

Guess how much I love you. (大1)

詩的でとても美しい。“If I…”で繰り返されるフレーズはテンポがよく、声に出しても心地よいのがこの作品の魅力。このストーリーは大好きなライブラリー”Guess how much I love you”から生まれたとか。これだけ英語が使えるのだから、50語にするために、わざと (a) holiday, (an) astronaut, (a) new planet と3つの不定冠詞を抜いたのかもしれない。

ところで、上例が示すように、「おはなし」と聞くと、なにか工夫をこらした創作的なものをイメージするかもしれないが、実はそうではない。本名(2016)が述べているとおり、ESSCとは「フィクション、エッセイ、感想、思い出を自由に書くコンテスト」である。コンテストの目的は、テーマ活動などで学習した英語を使って、自己を表現する機会を提供することにつきる。

だから、次のような日常の断面を描写した「作品」は大いに奨励されるべきである。

(6) A Letter

I went to camp.

There are many people from many prefecture.

I promised to sand a letter with my friends
who made friends there.

A few days passed after the camp, I received
a letter from friends.

I was happy that I had never received so
many letters at once. (小6)

できごとが順を追って書かれている。それだけでなく、すなおな気持ちも表現されている。英語らしい表現や構文もできている。単数形、複数形の違いもわかっているようだ。おもしろいことを見つけてどんどん書こう。

(7) A beautiful evening

I was on the train and looked at the window.

Other people on the train looked really tired.

A girl sitting in front of me was watching outside

And she called out.

“Look! That is a big rainbow!”

Everyone on the train smiled at once!

...What a nice day! (高2)

表現はシンプルだが、情景がありありと目に浮かぶ。日常のひとコマを切り取っており、その

切り取り方がよい。前半は淡々とした記述だが、“Look!”でガラッと変わる。静が動となり、モノクロがカラーになった感じ。普段の日常のできごとを、多少でも注意深く観察すると、こんなにおもしろい描写になる。

3.2 「とってもしじかいおはなし in English」の意義とその評価

「とってもしじかいおはなし in English」という活動は、テーマ活動で出会った英語を使って、自分の思いを50語で表現する創作活動である。ここでは、まずその意義を確認する。そして、この活動と「作品」をどう評価するかを考える。

「とってもしじかいおはなし in English」の意義は、次のように集約できる。

1. テーマ活動で出会った英語の語彙、表現、構文は、英語の実際の運用能力を構成するかなりの部分にいたっている。
2. これらの学習した英語項目はさらに使用することで、自分のものになる。
3. 書くことは考える時間をとり、英語と思考を結びつける働きをする。
4. ラボっ子には英語を書く機会をあたえる必要がある。
5. 書けば書くほど英語力は定着化し、活性化する。
6. きっちり50語にするのは、50語でアイデアをまとめるように英語を操作する練習である。
7. ラボっ子に「英語は自分のもうひとつのことば」という気づきを引き出す。
8. 50語という「形式」は使いやすいので、これを使って創造力と想像力をうながす。

「とってもしじかいおはなし in English」の評価は、これを運営するラボ教育センターによるプログラム評価と、ラボ・パーティのチューターによる「作品」評価とがある。前者はESS(C)という英語自己表現の「場」をどう評価するかであり、その概念は上記2章で示しているので、ここでは後者について一言だけ述べておく。

チューターはラボっ子の「作品」を最初に目にする。たいがいはその成果に目を見張り、思わず賞賛のことばをかける。英語で伝えよう努力している姿を見ていれば、なおさらである。短期的で単発的な活動であるなら、それで十分ともいえる。問題はこれを継続的、かつ体系的な活動にした場合は別である。チューターは「作品」を評価し、フィードバックすることが望ましい。

ところで、評価と聞くと、成績（すなわち優劣）をつけると思いがちのようであるが、そうではない。評価とは、子どもの活動を見つめ、子どもが活動の過程で創り出した「作品」のなかに、どのような発達がみられるかを確認することである。よい点があれば褒め、不足があれば注意するというのが一般的なフィードバックである。子どもを育てるための「育成的評価」である。

褒めるのはそう困難ではないが、注意するのは難しい。「作品」を直すことは無意味であり、できない。直して50語にするのは至難の業なのである。では、不足のところはどう注意したらよいのか。不足はたいがい英語の語法にある。今、これを注意すべきか。どうやって注意しようか。もう少し様子を見ようか。チューターは思いあぐねている。

重要なことは、書く回数が増えれば増えるほど、英語の逸脱は少なくなる。だから、継続的にたくさん書く必要がある。子どもはこれで、英語の生成ルールを自律的に学習する。チューター

は子どものなかに生じる変化を見守り、フィードバックが有用と思う子にことばをかけ、子どもの反応を見定めながら、次の対応を考える。現在はこれで十分である。

私は ESS(C)（もしくはそれに相当するライティング活動）が多くのチューターの賛同を得て、ラボのテーマ活動の一環として体系化されることを期待している。そうなれば、「作品」の評価方法を開発しなければならない。それはラボのグローバル人材育成と英語教育プログラムに適合したものでなければならない。

ラボの教育理念は世界に羽ばたき、国際社会に貢献する人間の育成である。これは今でいう「グローバル人材育成」のことである。そのために、子どものときから、異文化に触れ、コミュニケーションに慣れ、感性と知性を磨き、他者を理解し、自己を表現する学習プログラムを提供している。英語教育はその一環に組み込まれている。ここでその枠組みを見極めたい。

4. グローバル化時代に学ぶ英語

21 世紀は世界のグローバル化がますます広まり、深まると予想される。では、グローバル化とはどういう現象なのか。多くの人びとは、グローバル化は社会や経済の制度、さらには人間の価値観の画一化をもたらすと考えがちである。たしかに、そういう側面はある。同時に、あるいはそれ以上に、グローバル化は多様な社会を造り出す原動力にもなっている。

事実、グローバル化により、人間をはじめ、ビジネス、サービス、物品、金融、仕事、情報、思想などが国境を越えて、世界に拡散している。そして、世界の多くの都市は、多民族、多文化、多言語社会になりつつある。私たちは違った民族、文化、言語の背景をもつ人びとと共に働き、共に生活することになる。

4.1 新しい社会に適した新しい能力

私たちはこのような状況のなかで有意義な活動をするためには、この新しい社会に適した、新しい態度（マインドセット）と能力（コンピテンス）が必要になる。それは、次の2つにまとめることができる。

- (1)多様な民族、文化、宗教、言語、そして伝統と習慣に敬意をはらい、許容する心構え。
- (2)さまざまな違いを言語コミュニケーションで相互調整する能力。

すなわち、グローバル化時代では、言語コミュニケーション能力が極めて重要な役割をはたす。英語は現在、異文化間、あるいは多文化間コミュニケーションの言語として世界の各地で最も広く使われており、その役割は今後ますます拡大すると予想される。そこで、私たちがグローバル化時代に英語を学ぶためには、それにそった新しい観点が必要になる。

グローバルな英語コミュニケーションでは、世界の民族、文化、そして言語の多様性の仕組みを理解し、インクルーシブな相互作用を通して、会話や対話を協働構築する力が求められる。これは現代の英語学習に課せられた、新しい次元といえるであろう。英語は多様な文化的背景をもつ人びとをつなぐ言語なのである。

こう考えると、グローバル化時代に求められる英語コミュニケーションの能力は3つの要素で

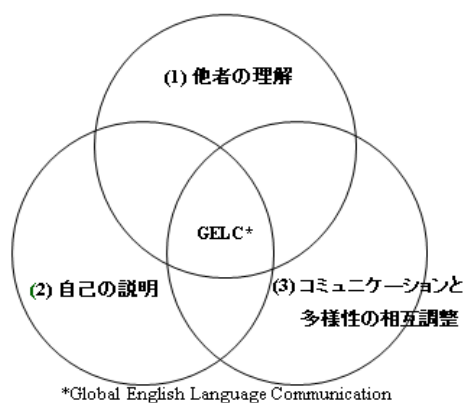
成り立っていることがわかる。(図1参照)

- (1) 他者を理解する能力。
- (2) 自己を説明する能力。
- (3) コミュニケーションを大切にして、多様性を相互に調整する能力。

これは従来の区分でいえば、(1)はリーディングとリスニング、(2)はライティングとスピーキングと考えられる。しかし、実際の英語コミュニケーションでは、そのようなしきりは適切ではない。話しことばでも書きことばでも、(3)のコミュニケーション能力が重要になる。それは(1)と(2)の能力を強化し、活性化させる。しかも、それは2者間のみならず、多数者間コミュニケーションでもあてはまる。

図1

グローバル英語コミュニケーション能力の3要素



2.2 コミュニケーションと相互調整能力の3要素

英語コミュニケーションは他の英語の話し手と協働して、特定の目的にそった成果をあげる営みである。学校教育では理想的な形でこの機会を提供することは困難であるが、それでもできるかぎりの工夫が求められる。コミュニケーションと相互調整の能力には、次の3要素がある。(図2参照)

(1) 相互作用能力 (Interaction Management Competence)

これは、他の参加者と協力して、会話を目的(目標)にそって進行させ、それを達成させる能力といえる。そのためには、会話の目的や目標(信頼の醸成、情報の交換、合意の形成など)を掌握し、同時に他者の言い分をバーバルとノンバーバルの面で理解し、自己の意図を説明する能力が必要である。そして、ターンのやりとりをスムーズに行い、会話のなかの曖昧な部分を明確化する力(パラフレーズなど)などが求められる。

(2) 相互順応能力 (Accommodation Management Competence)

会話のなかで相互の言い分や言い方を場面に応じて調整し、順応しあう能力は、相互理解とコ

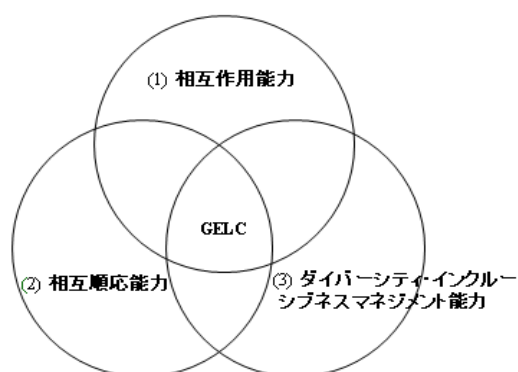
コミュニケーションを充実されるのに必要である。お互いに自分にとって聞き慣れない、見慣れない表現や行動に興味を示し、理解しあう努力が期待される。そのためには、メタファー、社会言語学的変異、語用論的行為など、言語とコミュニケーションの仕組みと働きの基本的要素を学ぶ必要がある。

(3) ダイバーシティ・マネジメント能力 (Diversity Management Competence)

多様な民族、文化、言語の背景をもつ人びととのコミュニケーションでは、いろいろな違いを認めあい、感受性を磨き、インクルーシブな態度で臨まなければならない。グローバル英語コミュニケーションは、多くの話し手がバイリンガルなので、英語以外の言語が複雑に編入される。複言語主義 (plurilingualism) と複文化主義 (pluriculturalism) の利点を十分に理解する必要がある。

図 2

コミュニケーションと相互調整能力の3要素



以上のことは、英語の発音、語句、文法などを学習するのと同じくらいに、大切である。英語学習とは、「英語」を学ぶというよりも、英語を使って世界の人びととコミュニケーションする能力の獲得をめざすというのがより適切である。そうであるならば、英語教育を有意義な教育活動にするために、他者の理解、自己の説明、コミュニケーションと相互調整、という3つの要素を統合したプログラムの開発が求められる。

5. 現代の英語はどういうことばか

英語はずっと以前から、英米の国境を越え、世界中に広まっている。現代英語でとくに著しい現象は、非母語話者どうしが英語を使うということである。このケースは非母語話者と母語話者との出会いよりもずっと多い。そうなると、母語話者との交流を主要な目的とした英語学習と英語教育は、多くの場合あまり現実的ではない。

5.1 英語は世界の人びととの相互理解とコミュニケーションのことば

このことは、アジア諸国ではっきりといえる。アジアではアジア人どうしが最も頻繁に英語を使っている。ここでは、ノンネイティブとネイティブとの英語使用は限られている。このことは、学校の英語教育でも、十分に認識すべきである。太郎とジョンとの会話もだいじであろうが、花子と群群（中国人の名前）の例も想定すべきなのである。

重要なことは、アジアの人びとは英語を活用すると同時に、その音声、語彙、文法、意味、そしてプラグマティクス（語用論＝表現と意図との関係）の面で、新しい次元を開発している。私たちは英語をアジアの文化的状況のなかで使っているのである。このために、英語は脱英米化（de-Anglo-Americanization）の傾向をおびていく。

さらに、英語はアジアで多文化化している。アジアのさまざまな国の言語と文化が、それぞれの英語に反映されるのである。各国に独自の英語パターンが発達しているか、あるいは発達の上にあるといえる。アジアで英語を使用するさいには、アメリカ文化やイギリス文化はあまり重要な役割をはたさない。このことは、世界の各地で同様にみられる。

そこで、英語学習と英語教育で「文化」を扱うさいには、注意が必要になる。「英語の文化」は「アメリカの文化」や「イギリスの文化」ではない。世界のすべての文化をさすのである。もちろん、そうかといって、それをすべて学ぶというわけにはいかない。いろいろな文化、コミュニケーションスタイル、言い方に興味をもつことがたいせつなのである。それが英語学習の進歩につながる。

5.2 英語は多文化言語として拡大中

このように、英語は国際的普及とともに、きわめて多様な文化を反映する言語になった。このことを考えると、興味深い現象に気づく。およそすべての言語はその機能と構造において、無限の発展と変容の能力を持ち合わせている。その可能性を使い果たしてしまった言語は存在しない。

すべての言語において、ネイティブスピーカーが開発してきた部分は非常に限られた範囲である。英語がノンネイティブスピーカーの手に渡ると、彼らは独自の言語・文化・認知のシステムを利用して、ネイティブスピーカーが運用してこなかった語法を探求しはじめる。すべての言語は無限の可能性をもっている。

たとえば、シンガポール英語やマレーシア英語は、もちろんネイティブスピーカーの英語と多くの部分が共通しているが、**Wait here, lah.**（ここで待ってね）に代表されるような、文や語の最後に付加される小辞をたくさん使用する。**Wait here.** というと、命令文なので強圧的に聞こえるが、**lah** をつけると柔らかくなる。

これらは日本語の終助詞（「ね」「よ」「さ」）に相当し、いろいろと微妙な意味合いを表現する。つまり、英語の話し手のエトス（文化的特質）が反映されるのである。「私は英語を話す、イギリス人ではない。シンガポール人（マレーシア人）です」といったメッセージを伝達しているといってもよい。

日本人も、独特の小辞を付加することがある。**I like sushi-ne.** や **Oh, I like tempura-yo.** といったぐあいである。日本では、外国人の英語スピーカーも日本人とのコミュニケーションのなかで、こ

れらをけっこう使っている。「私は日本人の英語の言い方を理解しています」の意味が込められているのかもしれない。

このようにして、これらのローカルで、非母語話者の表現は地球的規模で、英語のなかに溶け込んでいる。非母語話者は英語を多文化言語として拡大していることがわかる。世界の人びとが英語を使えば使うほど、この傾向に拍車がかかる。そして、英語の構造的、機能的キャパシティーはますます広がるのである。

5.3 コミュニケーションと相互調整

世界の人びとは自分の民族文化に合わせて英語を使う。わからない表現があれば、相手に聞いてみる。こんなことを聞くと失礼になるなどと心配する必要はない。図1で示したように、相互理解には、話し合いはぜったいに必要で、そのためにはおたがいに多少の不便はがまんできる。私たちの英語にも質問がくるかもしれない。ていねいに説明するクセをつけたい。

山田さんはタイに短期留学したときに、タイ人が英語のなかで *mai pen rai* とよくいっているのに気づいた。英和辞書にないので、タイ人学生に意味を聞くと、*Never mind.* とか *You're welcome.* の意味だとわかった。あるとき、自分も使ってみたら拍手され、*You're one of us.* といわれた。タイ人の仲間になったような気がして、とてもうれしかったという。

自分の解釈に自信がないときには、確認をとりたい。井上さんは香港のワークキャンプに参加したときに、車のトランクをブーツと呼んでいるのを耳にした。香港のリーダーに *Is the boot the same as the trunk?* と聞くと、*Yes, we call it a boot, but Americans call it a trunk.* という返事があった。英語の多様性とはこういうことなのかと思ったそうである。

5.4 多様なコミュニケーションスタイル

また、私たちはひとつのことを言うのには、いろいろな言い方があることをしっかりと理解する必要がある。依頼、謝罪、感謝、説得などを表明するには、一般に2つの方法がある。

- (1) 「まずフレームをいい、それからメインをいう」(フレームファースト)
- (2) 「まずメインをいい、それからフレームをいう」(メインファースト)、である。

メインとは、話題の中心のことで、フレームとは、その話題の文脈のことである。フレームは、メインに関連した理由、背景情報、話し手の態度などを表現する。どちらを先にいうかは文化に深く根を張っており、2つの方法があいまみえると、おたがいになかなか融通が利かないことがある。

そこで、人びとはおうおうにして、自分の方法が正しいと思いこんでしまう。以下は、香港が中国に返還される前に、香港警察署で実際に起きたできごとである。

-
- 中国人巡査 B がイギリス人警視 A の部屋をノックする。
A: Yes? (どうぞ)
B: My mother is not very well, sir. (母の具合が悪いのです)

A: Yes? (ええ?) (眉間にしわを寄せる)

B: She has to go into hospital, sir. (入院しなければなりません)

A: So? (それで)

B: On Thursday, sir. (木曜日です)

A: What is it that you want? (君はいったいなにを言いたいのか) (苛立ちの表情をあらわにする)

B: Nothing, sir. It's all right. (いえ, いいです) vi

ここではコミュニケーションは成立しなかった。巡査は入院する母の面倒を見るために休暇がほしかったが、中国式のフレームファーストの様式に慣れていたため、なかなか要点を切り出せなかった。この会話の記録では、警視は巡査のいいたいことがわかっていた。それでも、警視はイギリス式のメインファーストのスタイルをよしとしたため、それを受けとめられなかった。

このようなコミュニケーションスタイルを起因とする誤解や衝突は、いたるところで生じている。これらを解消する努力は、2つの面で求められる。これは上記の図1と2で明らかである。まず、人間の言語には同じことをいうのに、いつも別の言い方があり、自分の言い方だけが正しいと思ってはならないということを、しっかりと認識することである。

現代英語の多文化化を考えると、イギリス人警視のように、相手のいいたいことがわかっているにもかかわらず、言い方が自分流でないために知らないふりをするというのは権威主義的で、かつ独善的で、控え目についても大人気ない行為であろう。linguistic egocentrism (言語的自己中心主義)は願下げである。

ネイティブはどちらかというともメインファースト、ノンネイティブはフレームファーストを選択する傾向にある。しかし、コミュニケーションスタイルそのものには、その優劣を決める要素はなにもない。もちろん、状況によっては一方がより便利であるということはある。たとえば、緊急事態の場合は、だれでも要点を先にいう。普段であれば、両方とも有効のはずである。

次に、違いを乗り越えて、コミュニケーションを維持し、実らせる能力を獲得することが求められる。上の例でいえば、What is it that you want?に対して、So can I have some leave, sir? (休暇がほしいのです)とすぐさま応じる。そうすれば、コミュニケーションスタイルの違いを越えて、望ましい結果を得られたであろう。

もちろん、職場コミュニケーションでは、力関係は無視できない。部下は上役に自由にものをいえないこともある。しかも、この場合は英国支配下の警察署におけるイギリス人警視に、中国人巡査がものいうのであるから、大変な状況であったことは想像がつく。それでも、なんとか思いを伝達しようとする意志と、そのための工夫が必要であろう。

もっとも、アジア人どうしでは、このような状況を処理するのに、あまり困難はない。アジア人はたいがいフレームファーストがふつうである。香港の日系企業であれば、日本人上司Aと中国人部下Bとの会話は、こんなふうになるのではないか。あなたがこの立場になったとして、あなたはどのようなだろうか。

B: My mother is not very well, sir.

A: I am sorry to hear that. (それは大変ですね)

B: She has to go into hospital, sir.

A: That's bad. (いけませんね)

B: On Thursday, sir.

A: What do you want to do? Go home early, or have some leave? (どうしたいですか。早退, それとも休暇)

B: I would like to have some leave for my mother. (母のために休暇が欲しいです)

A: OK. You can look after your mother. (いいでしょう。看病してやってください)

B: Thank you, sir. (助かります)

さらには、アジア人どうしなら、相手の最初のことばから、その意図をすぐに理解して、解決策を提示することもあるだろう。フレームがメーンを示唆している。あるいは、暗示的コミュニケーションが明示的コミュニケーションと同じ働きをしているともいえる。

B: My mother is not very well, sir.

A: Oh, you must be worried. Would you like to take a leave and take care of your mother? (心配ですね。休暇を取って、世話をしてあげてはどうですか)

アジア人どうしでは、おたがいにネイティブのスタイルに従わないほうが、コミュニケーションをうまく運ぶことができる。英語を話すなら、ネイティブと同じように話さない、というのがいかに不自然なことであるかが、ここでもわかる。英語は話し手どうしが最も便利と感じる方法で使うのが一番よいのである。

7. おわりに

以上、ラボの自発的創造的な英語表現活動のいくつかを取り上げ、その評価のシステムと機能について考察した。評価はプログラムのカイゼンのために、絶対に必要なプロセスである。そして、ラボの人材育成と英語教育プログラムを21世紀のグローバル英語コミュニケーションに求められる能力の観点から論究した。そして、ラボのさまざまな活動は、21世紀の多文化共生社会に生きる有能な人材の育成に貢献することを改めて確認した。

注

- i 本稿の編集にあたっては、ラボ教育センター教育事業局の木原竜平氏の協力を得た。ここに感謝の意を表します。
- ii ラボ教育センター教育事業局（当時）吉岡美詠子氏のお話と資料提供による。
- iii ラボ教育センター教育事業局の蒲健吾氏のお話と資料提供による。
- iv ラボ会員以外にも開放するかどうかなどの戦略的議論も含む。
- v 昨今、叱咤激励は指導法として人気がない。もはやアナクロニズムか。アカデミー賞受賞作「セッション」(2014)で第87回助演男優賞受賞のJ. K.シモンズ演じる高等音楽院ジャズ部門教授は迫真の演技。その厳格な指導法は今や無用の長物なのか。
- vi Honna, N., Kirkpatrick, A. and Takeshita, Y. (2019), pp.12-13 より。

参照文献

Honna, Nobuyuki, Kirkpatrick, Andy, and Takeshita Yuko (2019) *Across Cultures For Better English Communication and Understanding*. Tokyo. Sanshusha.